

---

# 神などいない

玉城 水雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神などいない

### 【Zコード】

N8015M

### 【作者名】

玉城 水雲

### 【あらすじ】

死んだはずの俺の目の前に立っていたのは、自らを『死神』と名乗るおかしな男だった。

「お前は良い死神になりそうだ。」

「って言われたって、俺は神という存在を信じちゃいない……

ボーアズラブです。それが好きな方だけどうぞ。

R指定は、一応しません。

## 患者と歯科（記載例）

かわらべの作品のチャイナストーンです。

## 思考と願望

『神なビ、この世界に存在するハズがない。』

たった16年という、短い人生だったが俺はこの事だけは学んだ。  
神山 灰（コウヤマ カイ）は薄れていく意識の中でふとそう思つた。

ああ、死ぬのか。

いやだなあ、俺ニユースに出んのかな。

『高校生男子 虐待によりベランダで死亡』

なんて、シャレになんねーな。

多分、そのニユースを見たやつは全員こいつ思つて笑うぜ  
『高校生にもなつて、親の暴力から逃げられなかつたのか。』  
つてね。

そうだよな。

よく、ニユースに出る話としては、小学生くらい  
中学生で、もう結構珍しいつてのに高校生かよ。

ああ、中学の時に死んでおくんだつたなあ。

腹、減つたな。今日で何日めだつけ？

飯食つてねーのは。

あー、お腹一杯なにか…甘いもの食べたかつたな。  
ついでに、恋もしたかつたし、いろんな洋服も買ってみたかつたし  
温かい布団に寝てみたかつたし、旅行もしてみたかつた。

妄想するのだったらしいだらう。  
だって、もう死ぬし。

友達の家にお泊まりとか、憧れだつたな。  
あ、俺友達いねーじやん。

携帯で遊んだり、ゲームしたり、そんな事もしたかった。

それらは、全部叶わなかつた。

このまま生きていたつて叶わなかつただらう。

このまま生きていたところで、体中の傷が増えるだけだ。  
ならいつそ、死んで生まれ変わった方がいいのかなあ？

思考と願望（後書き）

あつがむいわざもした。

## 始まる予感と嫌な予感

お……こ……おれ……

遠くから、今はあまり聞きたくない声が聞こえてきた。  
嫌だ。やめい。

おい……か……お……つてば……

何なんだ。

ちくしょい、だんだん近づいてきしおじやねーか。

「おーっ！ カイ、起きあひつてんだよー！」

「うわ———あつ——」

あまりにも、近くから声がして、否応なく俺は夢から呼びもじわれた。

「なんだよ。でっけえ声だすなよ。」

「お、お前がでけえ声だすからだるー。」

俺を夢から覚ましてくれたムカツク張本人はなんとも、気迫とか根性とかを一昨日どいつもか生まれたとき元気つかりに立っていた。

落としてきたような、やる気のない様子で突っ立っていた。

「ニーヤが呼んでる。行くぞ。」

「え? 何、突破口見つけたの?」

「……いや、なんかウソのやつが、来てるっぽい。」「はあー? どうゆー事だよ」

「……説明、めんどい。」

だから「イツは嫌なんだ。

この体中から『めんどい』オーラを放出させている、この男『リツ』は、俺の仲間の一人で、すごい直感でたいていの事が解っているくせに

面倒くさいから

といつて、俺に教えてくれない。

最初はそうゆうところに魅かれていたが、今となつてはむかつくなげだ。

いや、多分俺はリツが丁寧に教えてくれたって、それはそれでむかついていたんだろう。

俺は冷静なことだけが取り柄だ。

そんな、今はどりでもいいスキルで俺は自分自身を分析してみる。

そして、自暴自棄に陥る直前に俺は何かにぶつかった。

「いつたーい! …ん? カイ君だー。」

大袈裟に痛がり、大袈裟に俺の存在に驚いているのは  
リツと同じ、俺の仲間『スオン』。

そんなにピックリしなくてもいいだろ？。

一瞬だけそう思つたが、すぐに理由が解つた。

このところ、いろいろと事情があつて、部屋から一歩もでていなかつた。

多分、それだからだろ？。

一人で「ああ、そつか」と納得している俺を横目に、その集会？は進んでいた。

## アイシングルーチン（前書き）

話が前後します。

今回まちゅつぴつ、過去になります。

## アイシヒマイシヒ

痛い。

意識が戻った瞬間、感じたのはなんとも言えない痛みだった。

ああ。また、やってしまった。

身体も痛いが、なにより心が痛い。

やつと暗闇に目が慣れ、辺りを見回してみても  
俺以外には誰もいない。

ただ、少しだけベッドに寝てる俺の横が温かい。

そして微かに、アイツの匂い。

ふいに泣きそうになる。  
だから、俺は悪態をつく。

お前は死神は楽しいなんて言つたけど、俺は哀しいばかりだ。  
この嘘つかう！

つて。

まあ、そんなことしてるのは自分でも女々しく、あからといと思  
う。

それでも、俺はそんなことをしなければ、泣いてしまうから。

泣いたら駄目だ。

だって、俺は知ってるから…。

「ン」

ドアをノックする音と共に、今一番聞きたくない声がした。

「カイ…？今、いい？」

嫌だ嫌だ。  
今は駄目だ。

そつ、言おうとしたのに俺の手は勝手にドアを開けていた。

「…何?」

ドアの前にはリツが  
いつもと変わらない無気力そうな様子で立っていた。

「…おはよ。」

だけど、リツはいつもと違った。  
この違いはきっと俺にしか解らない。

…誇らしいんだか、虚しいんだか…。

「どうか、したの?」

中に入れよ、と仕草で示し促す。  
リツはコクンと頷き、入ってきた。

正直、今悩んでるのは俺の方で、よっぽど誰かに相談したい。

それでも、リツは俺以外には心を開いてないから

俺にしか相談できることを知っているから、無下にするわけにはいかない。

「…カイ、は…好きなやつ……こ…？」

一言一言、悩む様に、搾り出す様に告げられたその言葉に俺は固まる。

「……………い…ない…。」

「……………本…当…は…嘘…。」

俺には好きなやつがいる。  
大好きなやつだ。

でも俺はそれを…少なくともリツには言えない。

「え…だつてカイは…」

『い…ない』

俺のその答にリツは驚いていた。

「……アレは……違うんだ。」

何が違うのか…  
俺だつて解らない。

『俺とニーヤは付き合つてゐる。』

『頻繁に身体を繋げているらしく。』

一時期、そんな噂が出回った。

まあ、直ぐにデマだった、と付けられたが、  
あながち間違いでもない。

いや、2つのうち、一つは合っている。  
とにかく。

そう、確かに俺とニーヤはセックスをする。  
頻繁に。

だけど、だからといって恋人同士なのか、と言わわれたら、否。

俺たちは、付き合つてはいない。

セックスをする＝恋人

なら、恋人になるかもしねれないが……。

お互い好きなやつ＝恋人

なら、絶対に恋人には、なれない。

だって、ニーヤは俺のこと、好きじゃないから。

ニーヤには、好きなやつが  
いるから。

## ウホヒシタ

俺たちは

いわゆるオチコボレの集団だ。

力が弱い訳ではなく  
むしろ、強すぎる力を  
上手くコントロールしなかつたから、『オチコボレ』といつレッテルを貼られただけだ。

しかし、そのレッテルは高くついた。

『調教』という名目で俺らは地下の牢に閉じ込められた。

閉じ込められてから  
もう2年経つ。

大人しくしてれば、そのうちアッチが俺らを必要とする…といーヤ  
が言っていたが…これは本当かも知れない。

「僕は、君たちの力を借りたいんだ。」

俺らと外界を隔てる鉄格子の向こうでウカ…

つまりは、外でそれなりの地位がある男がそう言つたからな。

「でも、一つ条件を出させて欲しい。」

ゆつたりと、男は続けた。

「君たちが良い待遇を受けるためにも、一つだけ守つて欲しい事が  
ある。」

「…なんだよ。条件つて」

勿体振つたその話し方に痺れをきらじ、長い茶色い髪を一つに結んだ…俺の仲間の、ラクが先を促した。

「簡単に言えば、僕の言つことを聞くこと。かな。」

「はあ？」

今度は、背の小さい吊つ田の少年…これも俺の仲間の、サンアがキレ氣味の声を出す。

「……それ、こっちにメリットがあるわけ?」

俺らを代表して一ノヤが聞く。

「ある。それだけは保証するよ。だからね、難しい計算みたいな計画なんだよ…………」

不穏な空気が漂い始めたのを悟ったのか、ウエの男は詳しく説明してくれた。

難しかつたけど、上手くまとめねば……。

このウエの男、コアネといいうらしき、の命令を俺らが聞けば死神界の重鎮は、コアネが欲しくなるらしき。  
そのために良く解んないけど作戦があるみたいだ。

……これは良く解らなかつたけど、まあ、いい。

それでコアネが中枢の重役に就いたら、俺たちの立場を良くしてくれるらしい。

「…………とこう事なんだけど……どうかな。」

正直、信用できないな、と思つたけど、リツが何にも言わないから、  
多分大丈夫なんだろ?」。

あいつ、勘だけは良いから。

「解つた。でも、その作戦を実行するには、俺らが外にでなくちゃ、  
だぜ?」

「あー……うん。それについては心配しないで。僕…というか、コッ  
チの彼…レールが何とかするから。」

そういえば、ユアネの横にはガタイのいい男がいた。  
無表情だけど、ユアネが紹介?したときにほべこりとお辞儀をした。

「でね。この作戦がばれないためにも、早く実行したいんだ。明日  
中に僕らが外で下準備をして…明後日に実行したいんだけど…ダメ  
かな?」

「まあ、俺らはいいけど…。」

あまりに早い実行日に戸惑つたニーヤの返事は少し濁つていたが、  
ユアネは気にすることなく、笑顔で

「じやあ、また明日ー。」

と手を振りながら、去っていった。

## ウヒヒシタ（後書き）

コアネはリツの従兄弟…

という設定もあつたんですが……

いつのまにやら消滅していましたwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8015m/>

---

神などいない

2010年10月10日13時32分発行